

教育実習生には、教師としての覚悟を！

令和5年9月15日(金)、第2回学校評議員会を開催しました。評議委員は、別府大学・別府大学短期大学部学生部事務次長・海外留学推進センター事務長の村上 健様、本校後援会副会長の宮永 尚様、大分教育事務所長の安田憲司様です。今回は、児童の学びや教育環境に加え、教育実習期間中ということもあり、実習生の様子も見ていただきました。

評議員会では、主に、教育実習、学力調査について意見交換しました。「実習生には、教師としての覚悟、社会人としての心構えなども学んでもらいたい。」「言葉の使い方は、教員に限らず大事。きれいな日本語を使うことを心がけると良い。」「限られた時間の中ではあるが、子どもに関わることのすばらしさ・尊さを感じてもらいたい。」「学力調査は、ほとんどの項目で望ましい結果がでている。マイナスの結果については、しっかり分析し、改善できるとよい。」などの御意見をいただきました。



1-1



1-2



1-3



2-1



2の2



2-3



3-1



3-2



3-3



4-1



4-2



4-3



5-1



5-2



5-3



6-1



6-2



6-3

令和5年度第2回学校評議員会 議事録概要（大分大学教育学部附属小学校）

1. 日時

令和5年9月15日（金）
9:40～11:35

2. 場所

附属小学校会議室

3. 参加者

（学校評議員）

宮永 尚 氏

（附属小学校）

木村 典之／校長 築城 幸司／教頭

植田 聖紀／主幹教諭 桐野 愛／指導教諭

4. 当日の内容

（教育実習について）

指導： 新採用者に「強い困り」を感じる事項について、平成28年度から県教育センターと連携してアンケートを実施している。解消に向けて教育実習期間にできることを考え教育実習を改革してきた。さらに昨年度からは大学とも共有し、新しい教育実習へと進めてきている。

指導：今年度の改革、変更として

- ・「半日・一日担任」で担任業務を経験させる。1学級に3人の実習生の場合、一週間のうちに「半日担任」1回、「一日担任」1回経験できる。クラスへの実習生の配属が増えると、経験できる回数が減る。現状の人数配属がベストである。

- ・実習生の退勤を17時とした。昨年度は18時であった。職員の勤務時間が17時までである。その時間の中で実習生への指導を行うようにした。

- ・効率的な指導に向け、観察実習の間に「チャレンジ授業」を行うようにした。経験したことで本実習までの間に意欲が向上し、大学での指導案作成で自分事として取り組むことにつながったと聞いている。

- ・5本の授業全て板書指導案で作成させ、より実践的なものにしている。

- ・実習要項、大学で行った2度の事前講義の内容について、職員間でも共通理解の場をもち、組織的に行った。

指導： 大学4年間のうち、本校が担っているものとして、1年生での教職入門ゼミがある。「授業観察を通して、教職への関心・意欲を高めることができたか」という問いに、肯定的な答えの割合が伸びている。

また、実践に繋がるような学部のカリキュラムへの協力を積極的にこなっている。

観察実習と本実習の間に「指導案書き方演習」「ICT・板書の構造化演習」を行い、大学と本校職員の双方向で指導に関われる。

他にも3年生を対象に「板書演習」を、4年生対象に学級経営について中心とした「教職実践演習」を行った。

指導： 本年度新採用者のアンケートで、大分大学出身者が「教材研究の仕方」「1時間の授業」「付けたい力を意識した授業」について「困りを感じる」と回答した割合は、他大学出身の新採用者の困りを抱える割合よりも低かった。本校の実習で重点を置いてきた成果であると言える。

これまでも「困りを感じる」とされていた「1年間の

学校の流れ」「保護者対応」「行事などの動き」について、今年度、主幹教諭、教務主任が実習期間中に講義を行った。校長、栄養教諭の講義も行った。全職員で実習生を指導する体制である。

指導： 実習生へは、即戦力となる、研修期間というものではなく同じ仕事をする、ということを意識させ、実習期間を大切にするよう伝えている。

大分県の目指す教員像に則って、身に付けてほしい事柄を評価の観点としている。また、新大分スタンダードの授業を目指した教材研究や実践を行わせている。

宮永： 実習生は板書指導案を教育実習期間の学校内で作成するのか。

指導： 本実習の期間中に4本の授業を行う。2本については、実習に入る前に提出をする。道徳の授業については、先ほど話した大学での講義後続けて板書指導案を作成する時間を設けた。残り2本については、実習期間中に作成する。

主幹： 学校にいる間に観察の時間だけでなく、教材研究、授業案作成といった時間を作っている。

指導： 1日1時間は、教材研究の時間を確保している。

宮永： 授業をする際の言葉遣いについて、大分弁で話していることがあったが、指導上どうなのか。わかりやすいということもあると思うが、標準的なもので伝える。丁寧語なども意識した方が良いのではないかと。

指導： 職員室でも話題があった。職員は気をつけている。ご意見をいただきありがたい。

主幹： 場面を考えた言葉遣いをしていく指導は行いたい。

宮永： 大分出身で大分大学にいて、大分で先生になった時に、標準語を意識して、是正していくという場がないと思う。また、きれいな日本語の使い方をする方が先生として望ましいと思う。

主幹：フレンドリーと場面を考えないは違うので、伝えたい。

宮永：授業を終えて担当の先生と意見を出し合う場面は設定されているということなので、意識して話をしてほしい。また、後半のグループにも生かしてほしい。

主幹：参加できなかった評議員から教育実習について意見をいただいた。※以下の〔〕部分はメールでいただいた意見

安田： すぐに現場で勤務になる。学生から社会人への切り替えの期間がないので様々な困りが生じる。実習期間中に授業技術の習得は最優先であるが、子どもと関わることのすばらしさ、教師としての覚悟、厳しさもしてほしい。社会人としてどうあるべきかについても学んでほしい。

主幹： 話題にあった言葉遣いについては、社会人としてどうあるべきかに関わることだと思う。

村上： 実習の中でできることと、なってから学ぶこともある。一般的な企業と異なり、1年目から要求されることの重責、業務の高度さが資料から、よくわかった。

「強い困り」を感じるという事項の中には、採用されてからの新人研修制度や丁寧なオリエンテーション、OJTなどの「制度」で解決するべきものもあるように感じている。

令和5年度第2回学校評議員会 議事録概要（大分大学教育学部附属小学校）

主幹： 昨年度の評議員会で宮永さんから「半日担任」について質問をいただいた。指導教諭からの説明の中でお答えした部分があった。

宮永： 新任の先生を各学校で補助するような人はいるのか。

主幹： 校内での指導を担当する教員が各校に1名、複数校を担当する拠点校担当が1名いる。拠点校担当は週に1日初任者と一緒に授業づくりや学級のことなどを指導している。学年が複数学級であれば、同学年の教員と一緒に学級経営や授業の計画などをする。

（全国学力・学習状況調査について）

指導： 平成25年度からの国語と算数の結果の推移を資料にしている。本校では、全国の国立附属小学校の結果と比較している。5年度では、国語で1.8ポイントのプラス。算数は1ポイントのマイナスであった。県や全国の結果は大きく上回っているが、算数の結果について、質問紙と合わせて要因を分析した。

「算数の勉強は好きですか」という質問で、否定的な回答を選んだ割合が高い。好きではない理由が、できない・苦手ということであるのではないか。困りを抱えているのではないか。ということが考えられる。今後の小学校での学習の中で、そういった児童の困りを取り除いていくことをしていく。

宮永： 理解ができないから難しいと感じて、そして面白くないと思うということか。教え方を工夫して面白く感じさせるというのは難しいのでは。

指導： 思考的な部分での難しさという物もあるが、まずは基礎的な物をしっかり理解し、正しく解答できるようにしていくところから、もう一度押さえていきたい。

指導： 児童質問紙の中で、自己肯定感が高い児童の割合が例年に比べて多い。また、認められていると感じている児童も多い。フリートーク、ほめ言葉のシャワー、成長ノートなどの学校全体での取組が効果を出している。また、昨年度の評議員会で、肯定的にとらえることができていない児童への取組について、意見をいただいた。児童の個別の回答を確認し、指導に当たる職員間で共通理解をし、指導改善を行っていく。

授業でのICT機器の活用頻度についての質問では「ほぼ毎日」と回答している児童の割合が6割以上と、昨年度に比べて大きく増えている。日々の学習活動の中で、文房具のように当たり前に使用するようになっている。

「英語の勉強は好きですか」の問いで否定的な児童が少し多いところがある。

校内研修の中で話題にし、これまでの成果を確認するとともに、各教科が好きという児童を増やしていくように取組を進めていく。

宮永： 意見交換を取り入れたコミュニケーション能力を高める授業を行っているので、自信を持てる児童が増えているのであろう。継続してほしい。

主幹： 否定的な回答をしている児童のこともしっかり意識し、指導に当たる。問題行動や気になることには、組織的に、迅速に、多様な場面を生かして解決へと進めている。

校内研究で情報活用能力の活用をテーマとして進め

ている。基礎的・基本的な力を伸ばしていくことと両輪で児童の指導を行うことで、算数についての苦手意識などを払拭できるようにしていく。

宮永： 算数については、様々なステップのつまづきが苦手意識へつながる。

働き方改革で、校内にいる時間が短くなっている中で、児童への指導をどのようにしていくかということでジレンマを抱え、苦勞されているであろう。教えるために時間を確保するということは必要だと思う。

主幹： 行事の精選や職務の効率化を図り、児童と向き合う時間や教材の研究等に充てられる時間を少しでも作っていくようにはしている。限られた時間の中で、より効果的な児童への指導ができるようにしていくことが、求められていることだと思っている。

宮永： 児童は宿題の量をどのように感じているのか。塾へ通う児童もいる中で、多いと感じていないか。適正な量というのは個人により異なる面もあると思うが、問題を解けたことやドリル学習をする中でのステップアップなどの喜びが楽しさや好きにつながる。

つまづいたところを塾や家庭でフォローしている場合もあって、そこには個人差がある。学校でのこまめな確認や指導が大切。

主幹： 先ほどの「英語の勉強は好きですか」のことがありましたが、ほとんどの児童が学習の観点でいくと評価は高い。ただ、かなり英語力をつけている児童もおり、その児童と比べて「うまくできていないのではないか」「苦手だ」と感じている児童もいると考えられる。十分にできているという自信を持たせていくことも大切である。

指導： 質問紙の中に「学習塾の先生や家庭教師の先生に教わっていますか」という項がある。「教わっていない」と回答している児童もいるが、「学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を教わっている」と回答している児童がかなり多くいる。このようなことも意識したうえで、授業づくり、支援をしていかなくってはならない。宿題についても同様の考えである。

（附属刷新プランについて）

校長： 前回の評議員会で柳澤さんから「刷新プラン」を刷新してはどうかと意見をいただいた。学校改革も進んでいる。第2ステージとして進めていくということを大学とも協議した。

8月25日には県教育委員会と大分大学で連携推進協議会を開催し、「附属機能強化プラン」という方向性が出された。2月に協議会が再度開催され、成案となる。現在も内容を精査している。

内容としては、地域に根差した附属学校園であるということで、「子供たちへの教育」「実習生への教育」「教員の人材育成」をしっかりとやれる学校であるということ。四校園が一つの敷地にあるという特色を生かしながら、四校園全体で大きなビジョンをもって取組を進めていくこと。などである。

以上

（文責）主幹教諭 植田 聖紀